

## 第2章 幼稚部

### I 結果と考察

#### 1. 回答者となった教員の属性

回答の分析から、回答者となった教員は147名と考えられる。

##### 1) 回答者の年齢構成

回答者の年齢構成を表2-1に示した。その中央値は43.0歳であった(24-67歳)。40歳台がもっとも多く、次いで、30歳台と50歳台、20歳台、60歳台の順に多かった。

年齢段階	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	無回答	計
人数	21	34	53	31	6	2	147

##### 2) 聴覚障害児に対する指導歴

教員歴および聴覚障害児に対する指導歴の構成を表2-2に示した。教員歴の中央値は17.0年であり(3-41年)、聴覚障害児に対する指導歴の中央値は8.0年(0-38年)であった。

次に、聴覚障害児に対する指導歴について表2-3に示した。難聴学級および通常学級における聴覚障害児に対する指導歴よりも、特別支援学校(聴覚障害)における指導歴の方が長かった。

年数	～5年	6年～10年	11年～15年	16年～20年	21年～25年	26年～30年	31年～	無回答	計	中央値 (Min-Max)
教員歴	15	22	23	25	21	21	17	3	147	17.0 (3-41)
聴覚障害児に対する指導歴	45	36	19	26	5	7	3	6	147	8.0 (0-38)

聴覚障害児に対する指導状況	中央値	(Min-Max)
特別支援学校(聴覚障害)	7.0	(0-38)
特別支援学校(聴覚障害以外の障害種)	4.0	(0-38)
難聴学級/通級指導教室	0.0	(0-6)
通常学級	0.0	(0-34)

##### 3) 医療機関との連携

###### ①医療機関との連携の有無

医療連携が有ると回答したのは82.4%、連携が無いとの回答は15.7%であった。

###### ②医療機関との連携の内容

連携に関して具体的な記述は101人からあり、記述内容は連携の内容と方法に関するものが合計202あった。これらを分析した結果を図2-1に示す。【情報共有・情報交換】との回答がもっとも多く、学校での活動時の様子、聴力測定等の結果を医療機関に伝えたり、病院での検査結果等が学校に

伝えられたりしていた。なお、【診察時に病院に同行し、マッピングやST指導場面の参観】するという回答は、「全ケースではない」という回答を含めている。

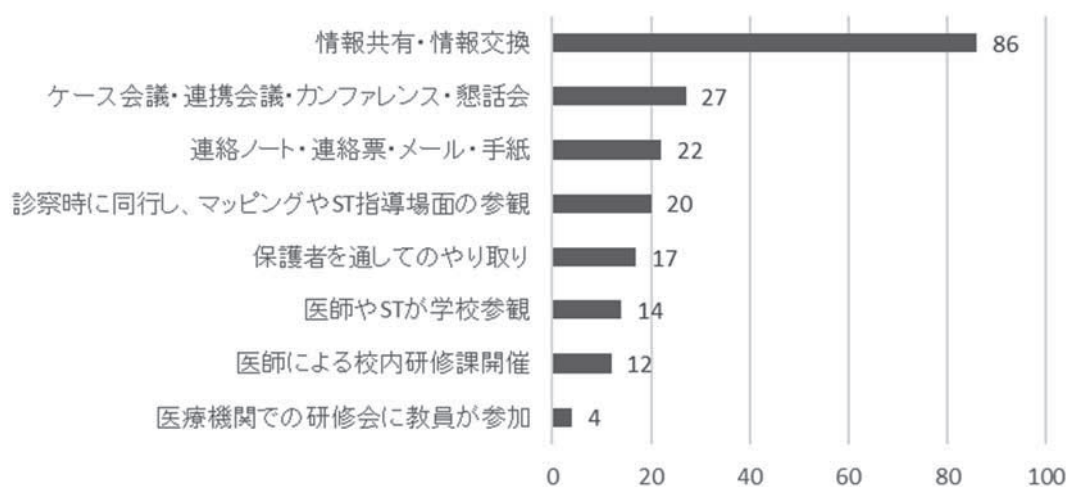


図2-1 医療連携の内容および方法

#### 4) 人工内耳装用幼児の指導

##### ①補聴器装用幼児に比べた指導上の課題

記述内容 157 件の分類結果を図 2-2 に示した。回答の中で多かったものは、【A.言語発達についての課題】と【B.特になし、補聴器装用児と変わらない】であった。A では、「聞こえているが意味を理解していない」等、言語理解に関する記述が 22 ともっとも多かった。また、B では、「補聴器装用児と人工内耳装用児の違いというよりは、個人の実態によるものが大きいと感じている」、「一緒に遊び、一緒に生活して過ごしているので、人工内耳だから難しいなという感覚は特になし」、「補聴器装用の子どもと比べてということではなく、それぞれのお子さんの実態や課題、マッピング状況、保護者のニーズに合わせて指導を行っている」などがあつた。以下、【C.傾聴態度】、【D.装用習慣、安全配慮】、【E.実態把握、評価】、【F.聴覚活用、聴き取りに課題】、【G.保護者支援】と大きな差がなく、多岐にわたる内容が記述されていたと言える。C では、「聴力をよく活用している場合、相手の顔を見て、口元を見て話を聞くという習慣がなかなか身につかない」、「顔を見てやり取りする意識が薄く、傾聴態度が育ちにくい」、「話者をしっかり見て話を聞く態度が弱い」などの記述が複数あつた。【L.その他】では、医療との連携に関する課題、機器の管理、プール遊び、交流保育等活動による課題等があげられていた。

##### ②補聴器装用幼児に比べた指導上の工夫

245 件の記述内容の分析結果を図 2-3 に示した。記述の中で多かったのが、【A.特になし、補聴器装用児と変わらない】、【B.聴覚活用に重点】だった。A では、「補聴器装用幼児と同じ指導をしている」、「人工内耳装用幼児児童生徒にも丁寧な指導が必要である」、「補聴器装用児と人工内耳装用児の違いというよりは個人の実態によるものが大きいと感じている」、「『人工内耳だから』ではなく『この子だから』という視点で指導している」などがあつた。また、B では、「様々な音に触れる機会を作る」、「音声情報のみであえて提示する場面をつくる」、「聴覚活用をできるように音声のみで話しかける」、「視覚的教材を

適度に活用しながら、様々な音や音声を注意深く聞くように促している」などがあつた。この中では、「音声のみ」で聴かせる工夫をしているという記述が複数合つた。以下、【C.話しかけ方に工夫している】、【D.文字、指文字、キューサイン】、【E.話し手に注目させる、聞く態度】、【F.理解の確認、聞き取り状況の把握】、【G.手話の活用】、【H.視覚教材・視覚的配慮】となっていた。個々の実態に応じて様々な工夫された指導が展開されていることがうかがえた。

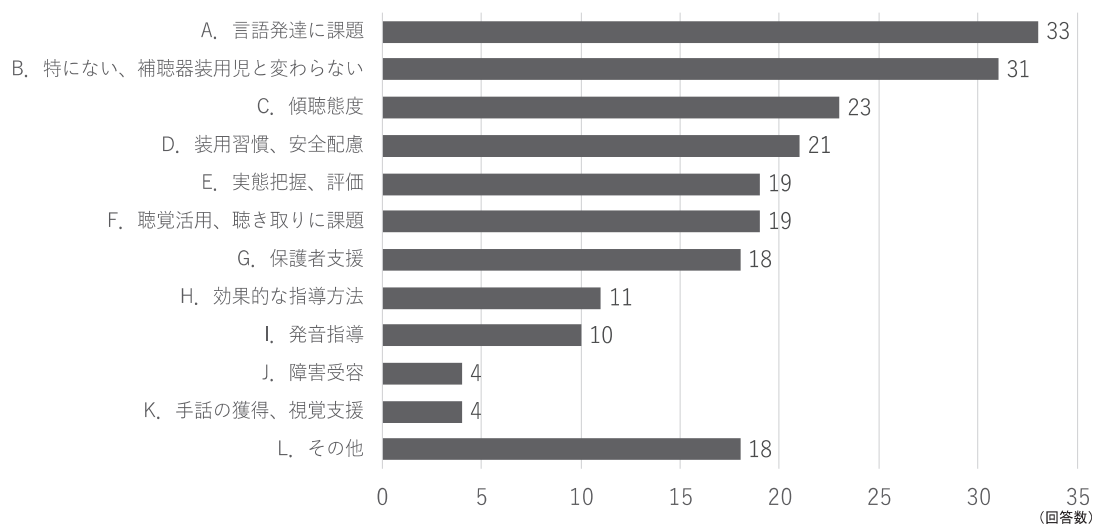


図2-2 指導上の課題

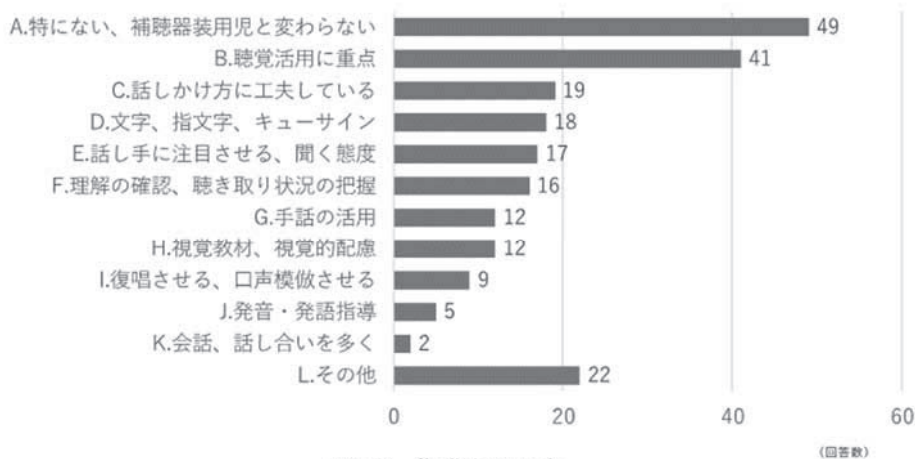


図2-3 指導上の工夫

### ③補聴器装用幼児に比べた指導上の違い

164 件の記述内容の分析結果を図 2-4 に示した。【A.聴覚活用が良好、コミュニケーションがしやすい】に関する記述がもっとも多く、次いで【B.特になし、補聴器装用児と変わらない】だった。次いで、【C.言語発達が良好、言語指導しやすい】、【D.発音が良好、発音指導しやすい】となっていた。

記述内容としては、A は、「離れたところからや視線が合っていないときも、呼びかけることができる」、「人工内耳で低音から高音まで、ある程度フラットに音が入っているという聴こえの状況から、音の届きやすさと聴かせやすさがある」、「音の世界が広がりやすい」、「小さい音まで聞こえるので、音声

でコミュニケーションをとることができる。すぐ教師を注視できる」などであった。Bでは、「特に意識せず、指導している」、「補聴器装用幼児と比べてというより、個人個人の特性があるので、特にない」、「補聴器だろうが、人工内耳だろうが、それぞれに難しさがあるし、それぞれに良いところがある。(中略)補聴器だからとか人工内耳だからという視点で、幼児の指導を考えていない。『個に応じた』が基本」などである。Cでは、「音声模倣が上手にできる」、「口声模倣を促しやすい」、「言葉や言い回しのバリエーションが広がりやすい」、「自発的に獲得できる言葉や文型が多い」などであった。Cの記述は、Aに分類した内容と併せての記述が多かった。【E.その他】では、「絵本の読み聞かせでは、絵と同時に文を楽しむことができている」、「人工内耳は防水機能に優れているため、地域交流保育などでは装用して活動が可能である」、「人工内耳がうまく活用できていない幼児がいる」、「不具合に自分で気付けるので、補聴状態を確認しやすい」などがあつた。

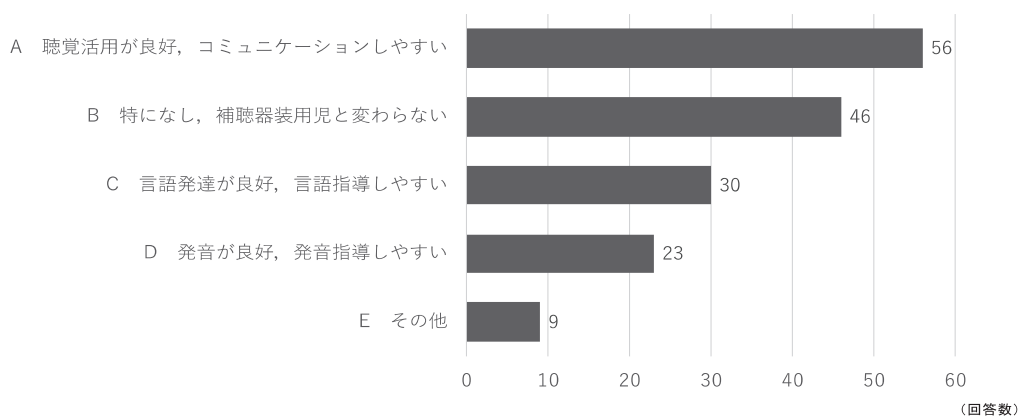


図2-4 指導のしやすさ

#### 5) 人工内耳装用幼児の指導にあたって学習したい研修内容

学習したい研修内容については、183件の記述があつた。記述内容の分類結果を図2-5に示した。

【指導方法や学習方法】に関する研修が最も多く、記述内容全体の38件(21%)であつた。また【基礎的研修】が33件(18%)、【関連機関の説明や最新情報】が28件(15%)となつていた。この結果を、回答者の聴覚障害児の指導経験年数を「5年以下(35人)」、「6～10年(26人)」、「11年以上(53人)」の3群に分けて比較した(図2-6)。「11年以上」の経験群では、【関連機関の説明や最新情報】に関する研修希望が最も多く、次に【指導方法や学習方法】に関するものが多かつたが、「5年以下」と「6～10年」の経験群では、【基礎的研修】、【指導方法や学習方法】に関する研修希望が多かつた。経験年数によらず、指導方法や学習方法に関するニーズが高かつたが、経験年数が浅い教員にとっては、基礎的な内容に関するニーズも高い傾向がみられた。



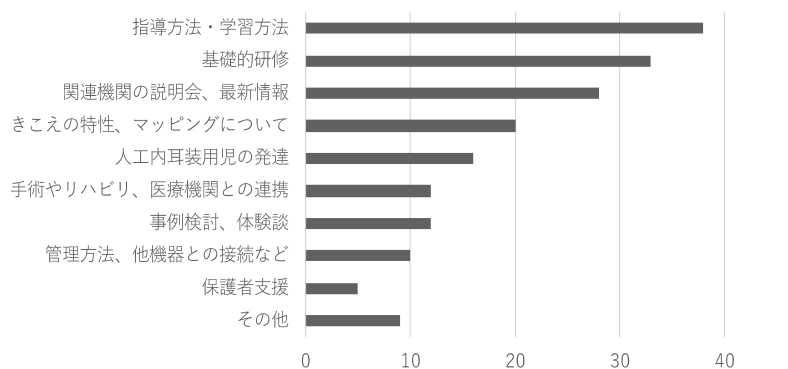


図2-5 学習したい研修内容

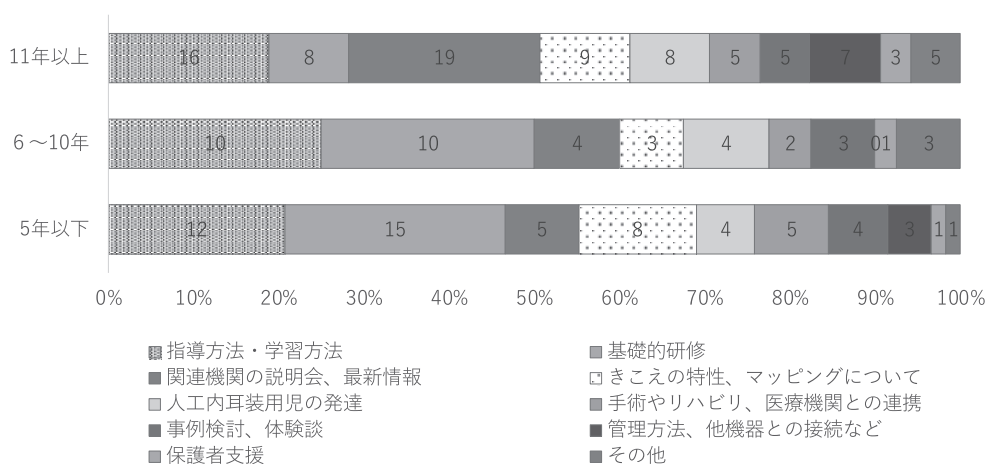


図2-6 学習したい研修内容（指導歴別）

## 2. 人工内耳装用幼児事例の概要

回答が得られた人工内耳装用幼児の事例数は、3歳児 89、4歳児 110、5歳児 111の合計 310 事例であった。また、このうち重複障害は、3歳児 16、4歳児 19、5歳児 14の 49 事例で全体の 18.7%であった。聴覚障害以外の障害種は、図 2-7 の通りである。「知的障害」と「その他」の回答が多かった。「その他」の回答には、「発達障害」に関する記述が大半を占めた。また「軽度の知的障害」や「発達障害の疑い」等の記述も含まれていた。

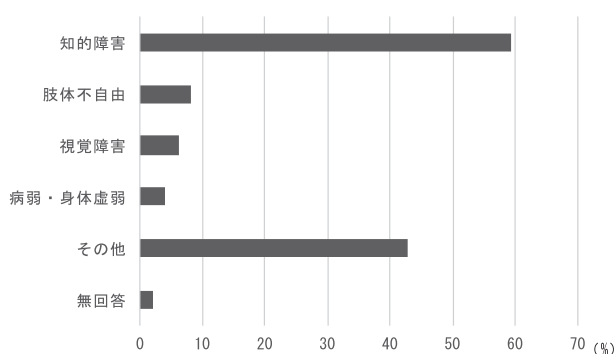


図2-7 聴覚障害以外の障害種

## 1) 聴覚障害診断時の年齢および人工内耳装用開始時期

重複障害の有無別にみた聴覚障害診断年齢を図 2-8 に、また、人工内耳装用開始時期を図 2-9 に示した。診断年齢では、重複障害の有無による顕著な差はみられず、全体として 1 歳未満での診断が約 7 割を占めており、2 歳前には、8 割強が診断されていた。人工内耳装用開始時期は、人工内耳装用は、1 歳台から 2 歳台で開始されており、重複障害群でやや 3 歳以降での装用開始の率が高くなる傾向が見られた。

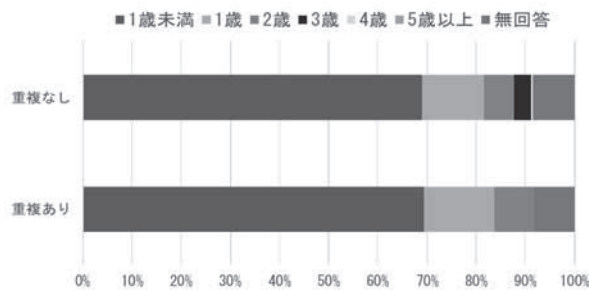


図2-8 聴覚障害診断の年齢

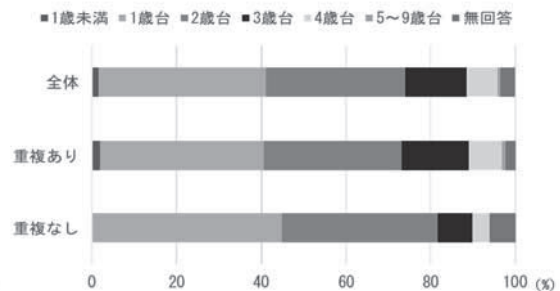


図2-9 人工内耳装用開始時期

## 2) 人工内耳装用状況

人工内耳装用状況および平均聴力レベルについての結果を表 2-4、図 2-10、図 2-11 に示す。人工内耳の両耳装用は、重複障害がない事例（以下、重複障害なし群）で 129、重複障害がある事例（以下、重複障害群）で 15 となっており、重複障害なし群で 5 割、重複障害群で約 3 割であった。また、人工内耳の片耳装用の中で反対側に補聴器を装用している事例は、重複障害なし群で 116、重複障害群で 28 で、重複障害群でやや少ない傾向が見られたが、全体的に人工内耳や補聴器の両耳装用が行われていることが分かった。

補聴援助システムの利用状況は、幼稚園全体において「利用有」が 36%、「利用無」が 61%であった。重複障害の有無による違いはなく、全体の 3 分の 1 程度が使用していた。

	右耳 (Min-Max)	左耳 (Min-Max)
人工内耳 術前 (裸耳)	100.5 (35.0-133.0)	101.5 (35.0-133.0)
人工内耳/補聴器装用下	39.0 (18.0-120.0)	40.3 (18.0-125.0)

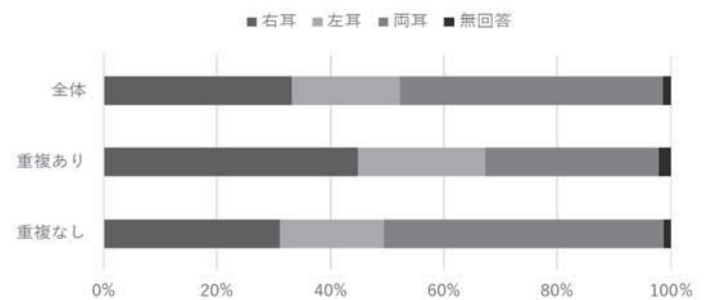


図2-10 人工内耳装用の状態

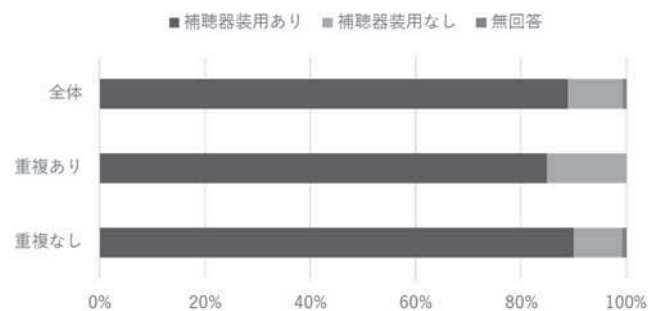


図2-11 片耳装用幼児における未装用側の補聴器装用の状態

### 3) コミュニケーション手段

普段使用しているコミュニケーション手段についての結果を図 2-12 に示した。音声と手話が共に 8 割を超えており、次いで指文字が約 5 割であった。「その他」の回答としては、身振り、指さし、絵カード、写真、発音サイン、文字などの視覚的手段の回答が多かった。また、学習場面で使用している手段としては、音声をあげる回答が多かったが、幼児の場合、普段使用しているコミュニケーション手段をベースに学習活動が展開されており、その上で音声を意図的に使用していることがうかがえた。

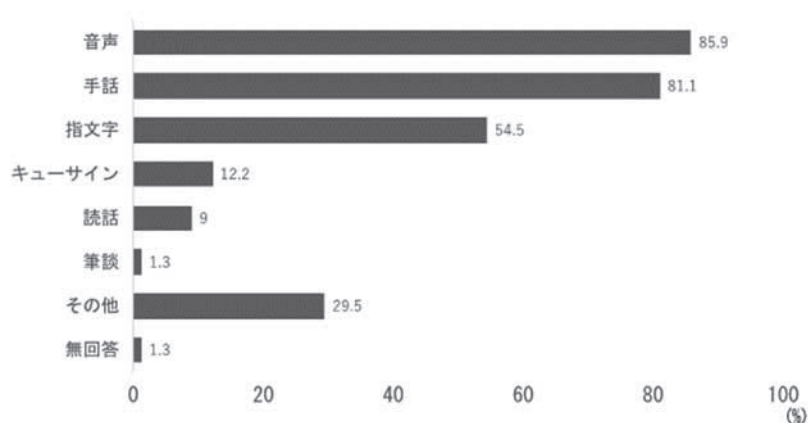


図2-12 普段使用しているコミュニケーション手段

### 4) 教育歴

乳児期の教育歴について図 2-13 に示した。特別支援学校（聴覚障害）における教育経験がある幼児が 242 事例となっており、多くの幼児が乳児期から特別支援学校（聴覚障害）に通っていたことが示された。また、全事例のうち 77 事例が複数の教育機関に通った経験があったが、このうち 24 事例は重複障害群で、重複障害群の約 5 割が複数の機関での教育経験があった。その他の施設としては、「放課後デイサービス」、「ST リハビリ」、「認定子ども園、保育所」、「児童発達センター（発達障害）」、「療育センター」があった。

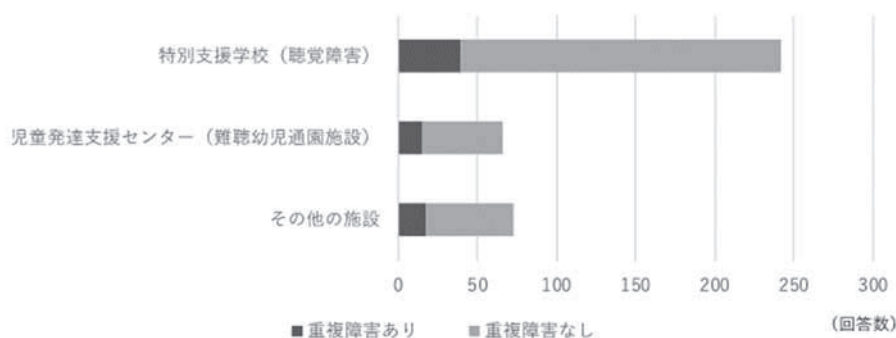


図2-13 人工内耳装用幼児の教育歴（乳児期）

### 5) 今後の進路希望

今後の進路希望について図 2-14 に示した。就学前の幼児が対象であったため、小学校段階における進路希望の回答が主であり、中学校段階以降の回答はほとんどみられなかった。小学校段階においては「特別支援学校（聴覚障害）小学部」への進学が 6 割程度であった。

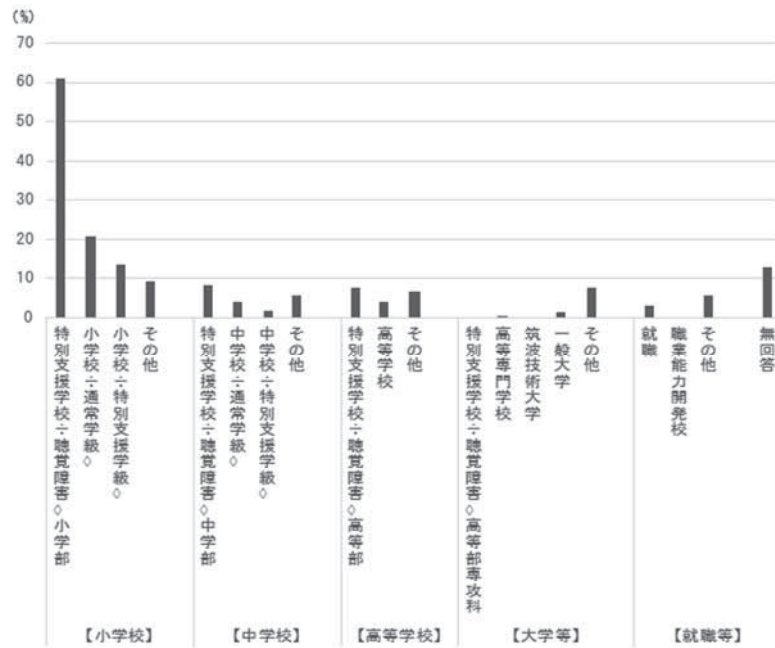


図2-14 今後の進路希望

### 3. 人工内耳装用幼児の聴覚活用の状態

#### 1) 音への気づき、言語音の聴き取り、傾聴の姿勢・態度について

3つの観点からの聴覚活用の状態の結果を図2-15、図2-16に示した。音への気づきの観点での状態は、どの学年でも、「きわめてよい」「よい」が8割近くを占めていたが、「言語音の聞き取り」「傾聴の姿勢・態度」は4割前後となっていた。しかし、「言語音の聴き取り」「傾聴の姿勢・態度」は学年が上がるにつれて「きわめてよい」「よい」と評価されたものが増えている傾向がみられた。重複障害の有無での比較では、3つの観点とも重複障害がある場合とない場合で大きな違いがみられた。

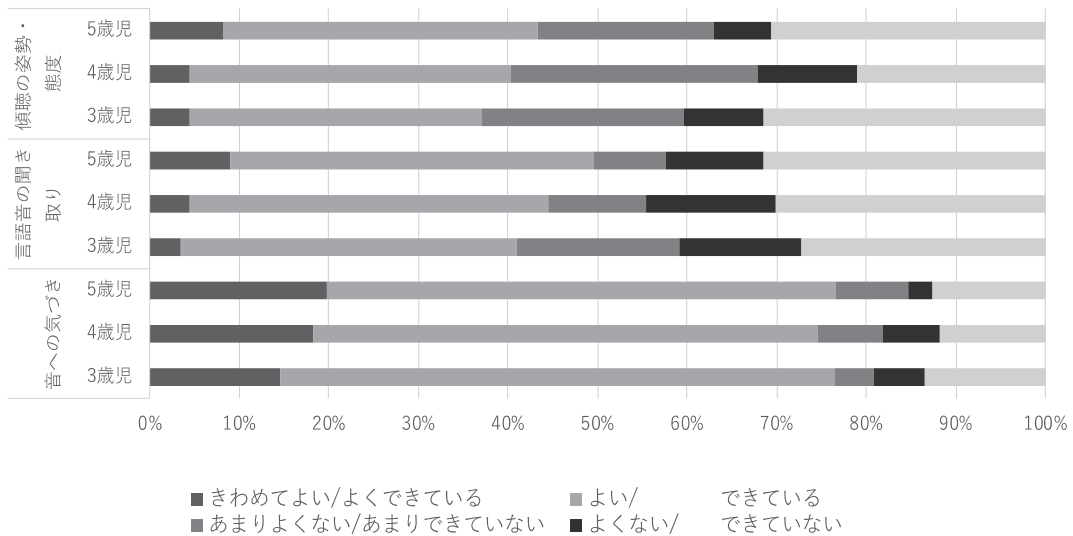


図2-15 聴覚活用の状態（学年別）

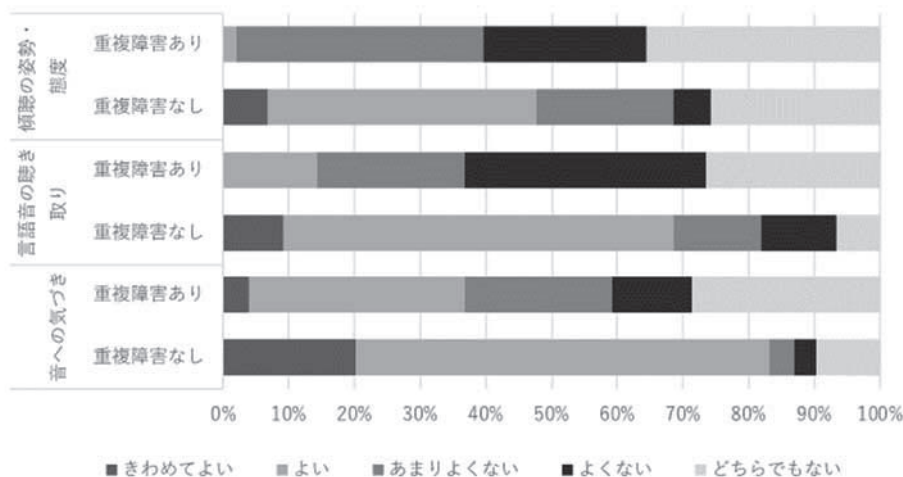


図2-16 聴覚活用の状態（重複障害の有無）

## 2) 聴覚活用に関する指導の現状と課題（記述回答）

記述内容は、大きく【a. 言葉の発達へのつながり言語指導の側面】、【b. 傾聴態度、聴覚活用への姿勢】、【c. 音への気づき、聴覚の活用を促す指導】、【d. 装用習慣に関する指導】、【e. 聴覚活用以外の手段（視覚教材や手話、サインなど）を併用しながらの指導の展開】、【f. その他】、【g. 無記入】に分類された。結果を図 2-17 に示した。

重複障害なし群では、3歳児の段階から a の記述が多かったのに対して、重複障害群では、年齢段階が進むにつれて a の記述が増える傾向がみられた。また、b については、重複障害なし群では多く見られたが、重複障害群では記述がみられなかった。さらに、e については、重複障害群では、3歳児の段階での記述がもっとも多かったのに対し、重複障害なし群では5歳児で多くなっていた。一方、c については、両群の違いは見られず、共に年齢段階が上がるにつれて減少していた。なお、F のその他の記述は、「人工内耳の効果がまったく見られない」等の記述が複数あった。重複障害群では、「他障害の問題が大きい」、「音への反応がよく分からない」といった記述も散見された。

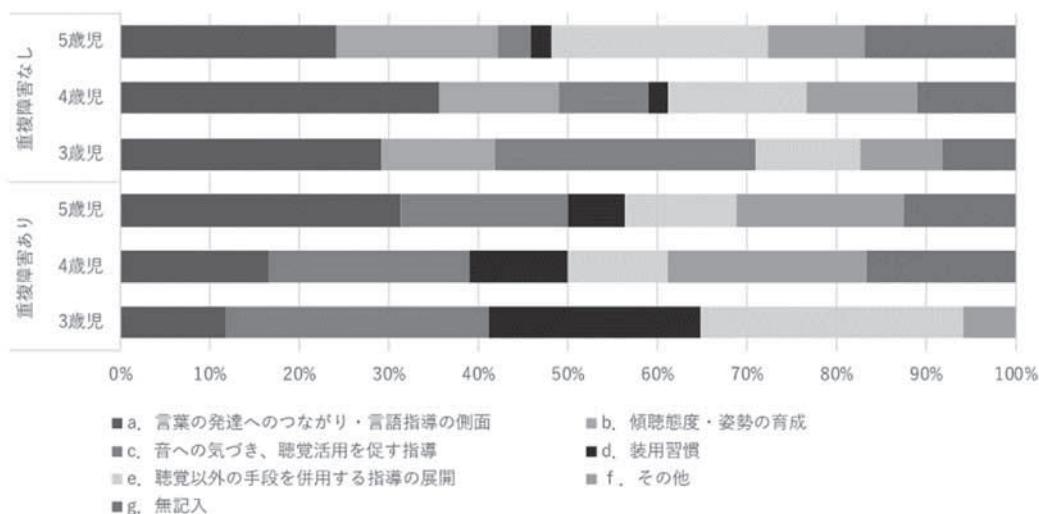


図2-17 聴覚活用の指導の現状と課題についての記述回答

#### 4. 人工内耳装用幼児の言語活動の状態

##### 1) 言語活動の状態

「文法力」、「文章理解力」、「書く力」、「作文力・文章構成力」についての結果を図 2-18、図 2-19 に示した。全体的に「やや低い」「低い」という回答が 80%以上を占めていた。同年齢の健聴幼児と同等以上の力があると評価されている割合は、「文法力」と「文章理解力」で年齢が進むにつれて上昇していた。「書く力」と「作文力・文章構成力」については、重複障害の有無によらず無記入の回答が多かった。

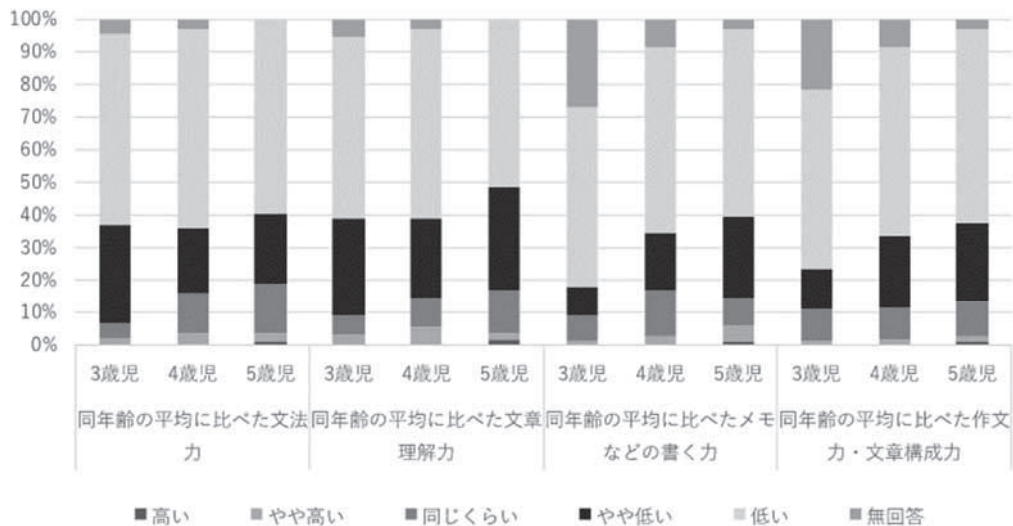


図2-18 言語活動の状態

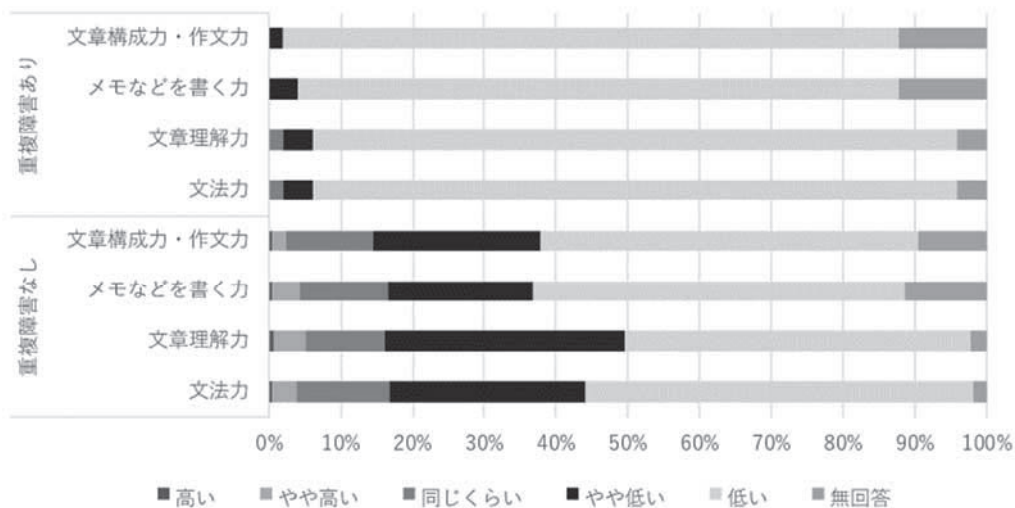


図2-19 言語活動の状態 (重複障害の有無)

##### 2) 言語活動に関する指導の現状と課題 (記述)

自由記述の内容の分類結果を図 2-20 に示した。【a. 語彙・言葉の概念形成】に関する記述がもっとも多く、次に【b. 助詞の指導、文による表現力を高める指導】に関する記述が多かった。具体的方法に関する記述については、ひらがな、口声模倣、絵日記、手話の併用、指文字やキューサインを含めた視覚的な手段の活用等があった。【m. その他・不明】には、「口頭による指導は行っていない」、「手話の



獲得を目標にしている」、「不安を除去する」、「環境設定」、「思考力をつける」等の記述があった。全体的に事例児の言語発達についての記述が多くみられた。また、重複障害の事例や3歳児段階の事例において「ひらがなの指導」や「文字の読み書きの力」に関する記述もみられ、早期から文字を活用していくという指導が行われていることがうかがえた。

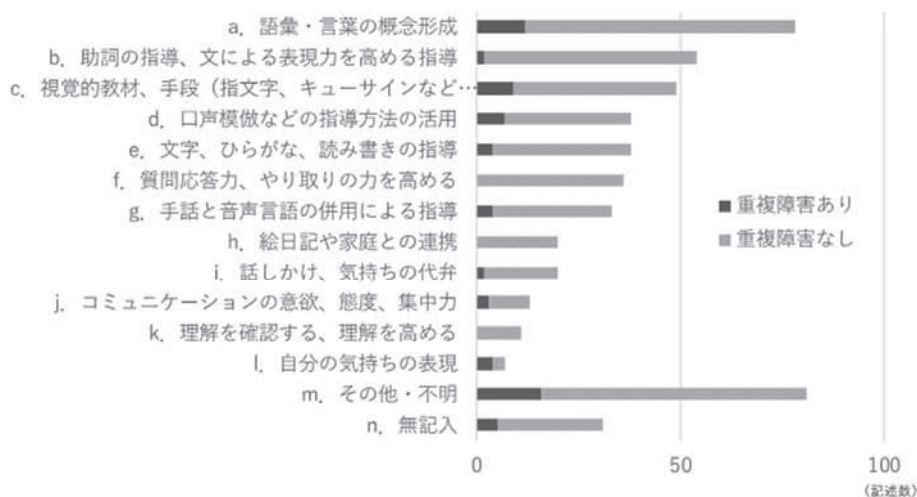


図2-20 言語活動の指導の現状と課題についての記述内容

## 5. 人工内耳装用幼児の学習と生活

### 1) 学習態度

「注意散漫」「注意持続」「口頭による指示への躊躇」に関する結果を図 2-21、図 2-22 に示した。また、指導の現状と課題についての自由記述の回答内容を図 2-23 に示した。【a. 指導の工夫】を課題としてあげる記述が多く、内容としては「視覚的な教材の活用」、「環境の設定」、「丁寧な言葉かけ」、「興味関心に沿った活動の展開」といった記述が多くみられた。また【g. その他】では聴覚障害以外の問題がある記述が複数あった。全体的に重複障害の有無によって結果は大きく異なっていることが明らかであったが、記述の内容からは重複障害の内容のほか、教育歴等の背景によって指導上の課題が多岐にわたることがうかがえた。

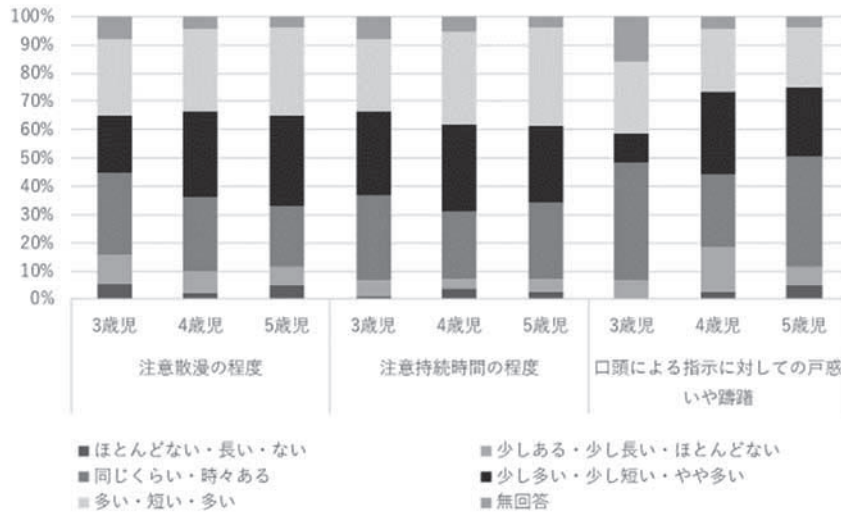


図2-21 同年齢の平均的な健聴の子どもに比較した学習態度

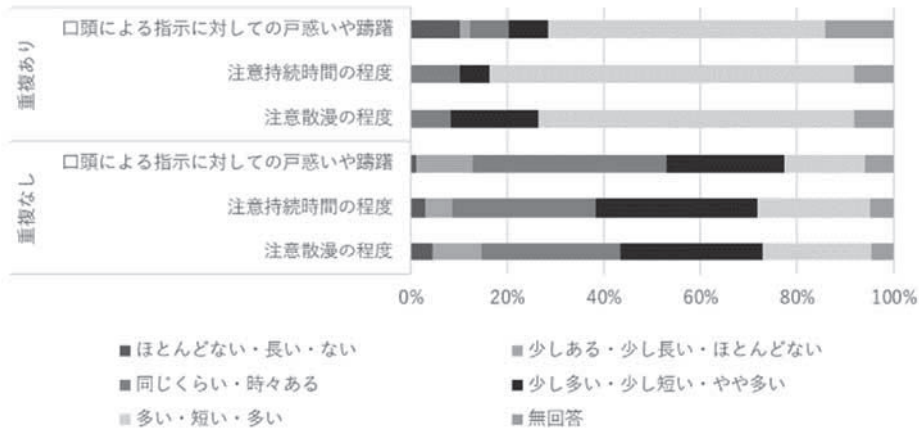


図2-22 同年齢の平均的な健聴の子どもに比較した学習態度（重複障害の有無）

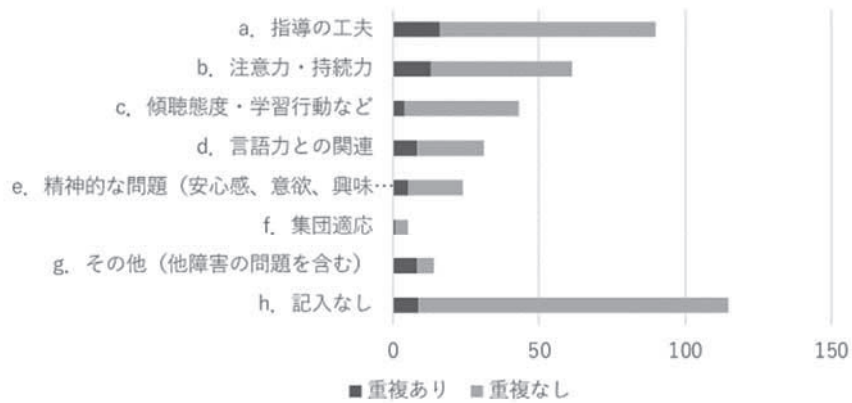


図2-23 学習態度に対する指導の現状と課題

## 2) コミュニケーション能力について

「コミュニケーション能力」「語彙力」「話す力」についての回答結果を図 2-24、図 2-25 に、コミュニケーション指導における現状と課題に関する自由記述回答の結果を図 2-26 に示した。重複障害の有無においては、どの観点でも明確な違いがあったが、学年ごとのコミュニケーション能力の状態については、どの年齢段階においても、おしなべて「やや低い」「低い」という回答が多い傾向にあった。また、指導上の現状と課題については、全体的に、「語彙の不足」や「考えや経験の言語化」といった【a. 言葉の力を高める】ことに関する記述がもっとも多かった。また、重複障害なし群においては、「質問応答力などのやり取り」に関する記述が多く、重複障害群では「教師の声かけや教材の工夫」、「手話などの様々なコミュニケーション手段の活用」、「写真や絵、体を使った遊びの中での非言語的なかわりを重ねていく段階」といった記述が多くみられた。

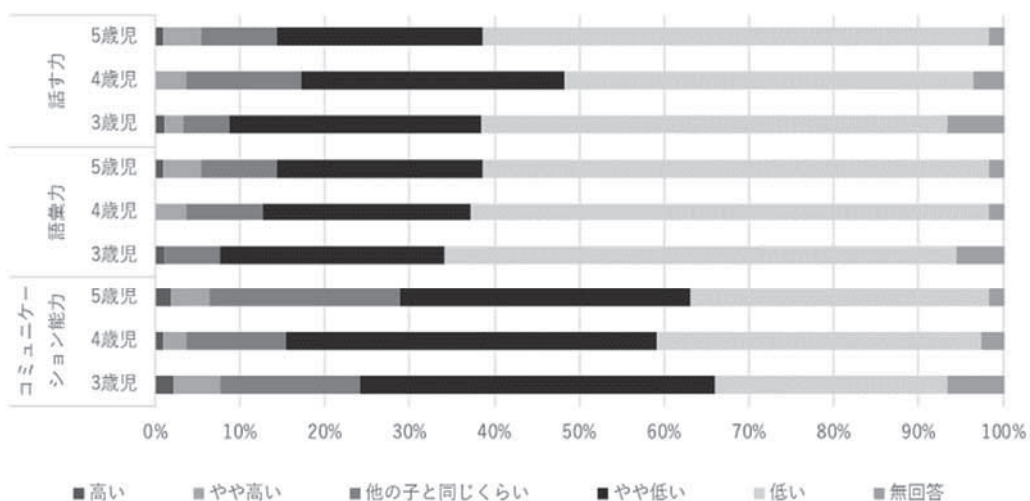


図2-24 コミュニケーション能力について

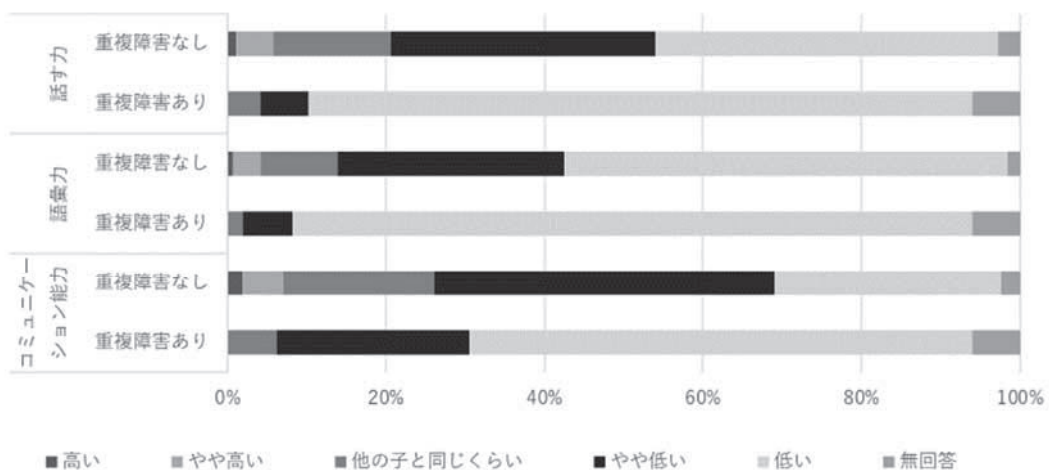


図2-25 コミュニケーション能力について（重複障害の有無）

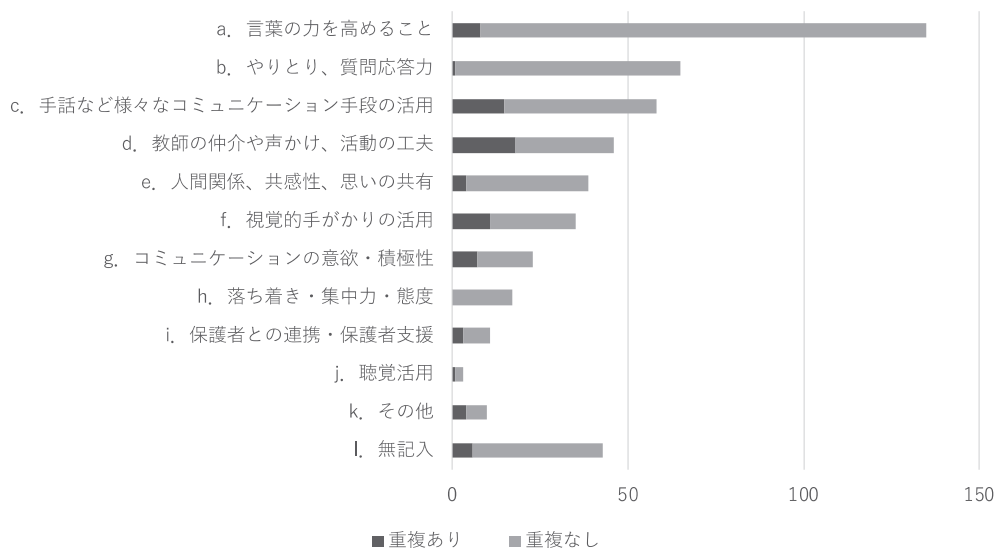


図2-26 コミュニケーション指導における現状と課題に関する記述

### 3) 学校生活について

学校生活については、「教師の質問、話し合いへの参加状況の程度」「持ち物の持参・宿題の提出」「指示後の課題の遂行の困難」での回答結果を図 2-27、図 2-28 に、また、単純回答で合計 8 点以下の事例に求めた記述回答の結果を図 2-29 に示した。単純回答では、どの点も比較的高い結果であった。記述回答では、環境設定や個別の配慮など【a. 指導の工夫、個別の対応など】に関する記述が、重複障害の有無にかかわらず、もっとも多くみられた。次に【b. 言葉・コミュニケーション】に関するものが多かったが、これは重複障害のない事例での記述がほとんどだった。【c. 保護者・家庭との連携・保護者支援】を課題に挙げる記述は、どちらの事例でも多くみられた。

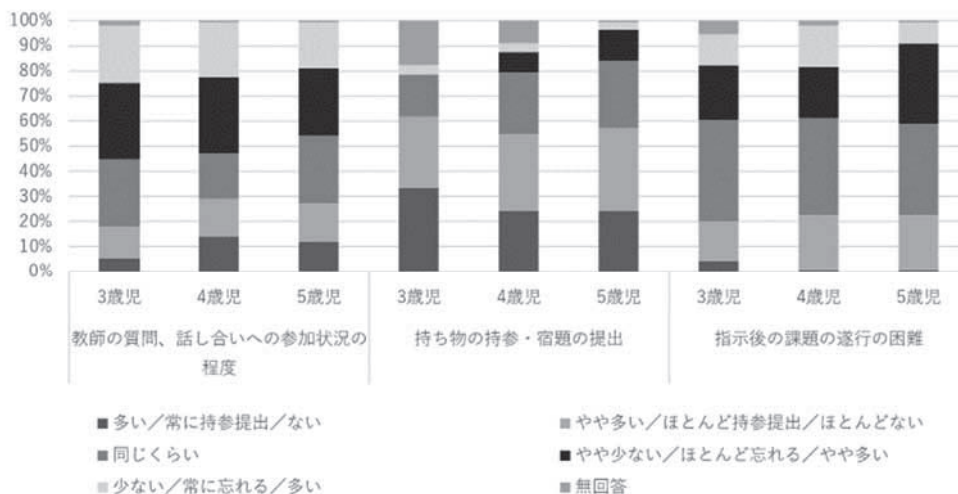


図2-27 学校生活について

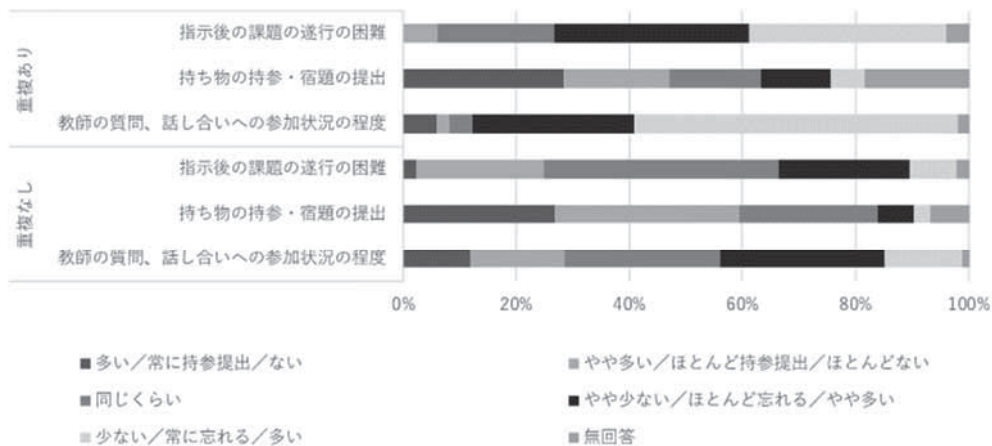


図2-28 学校生活について（重複障害の有無による比較）

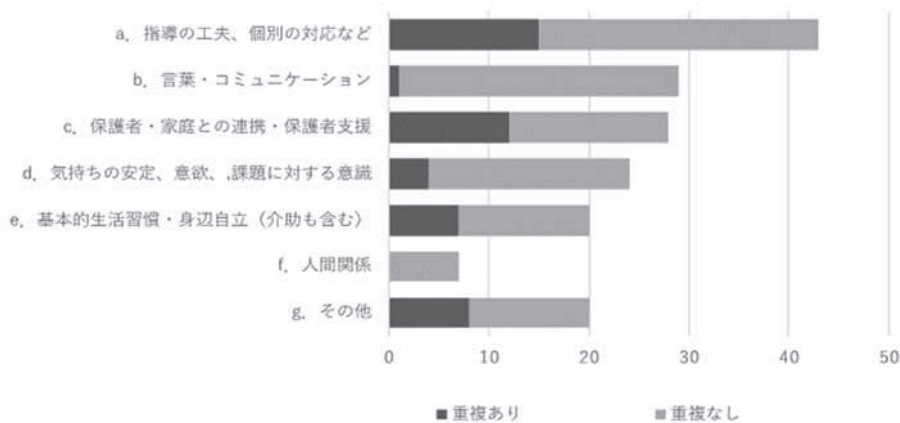


図2-29 生活指導の現状と課題に関する記述

#### 4) 学校での行動について

学校での行動について、単純回答の結果を図 2-30、図 2-31 に示した。「友人関係」の観点については、どの年齢段階においても「ふつう」あるいは「良好」「非常に良好」という回答が多く、とくに重複障害なし群では 9 割を超えていた。「不適切な行動」や「落ち着き・ストレス」の観点では、重複障害群でやや低い傾向がみられたが、重複障害のない事例も含めて個別の事例によって様々であることがうかがえた。単純回答の合計が 9 点以下の事例に対して求めた行動に対する指導の現状と課題についての記述の分類を図 2-32 に示した。記述された内容は多岐にわたっており、分類上の傾向は明らかではなかった。単純回答の結果と同様、個別の事例によって実態が様々であることがうかがえた。記述内容としては、「集団への適応に課題がある」、「周囲の状況を理解することが困難」、「気持ちの安定が重要」「活動に対する意欲を高めること」といったものが多かった。また、多動性や衝動性、こだわりといった発達障害の特性につながる傾向の記述も散見された。重複障害群では、個別的な対応を課題としてあげる記述が多かった。

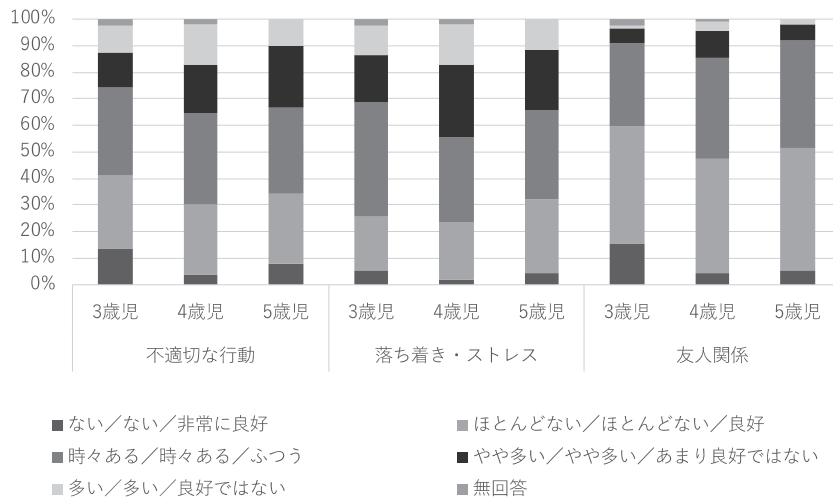


図2-30 学校での行動

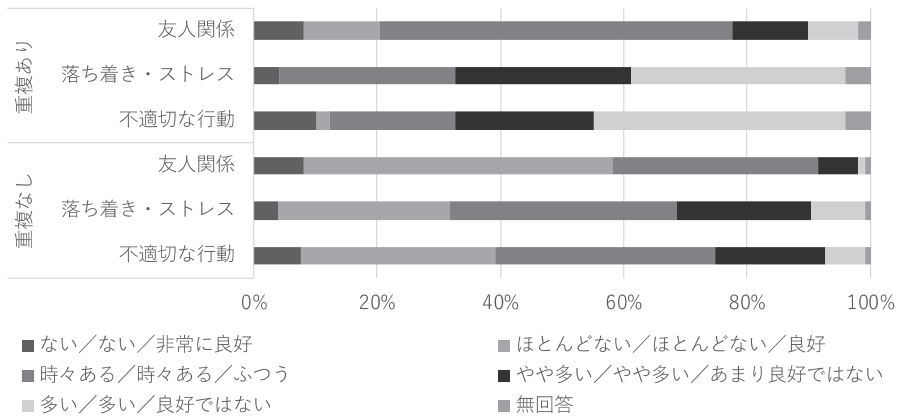


図2-31 学校での行動（重複障害の有無）

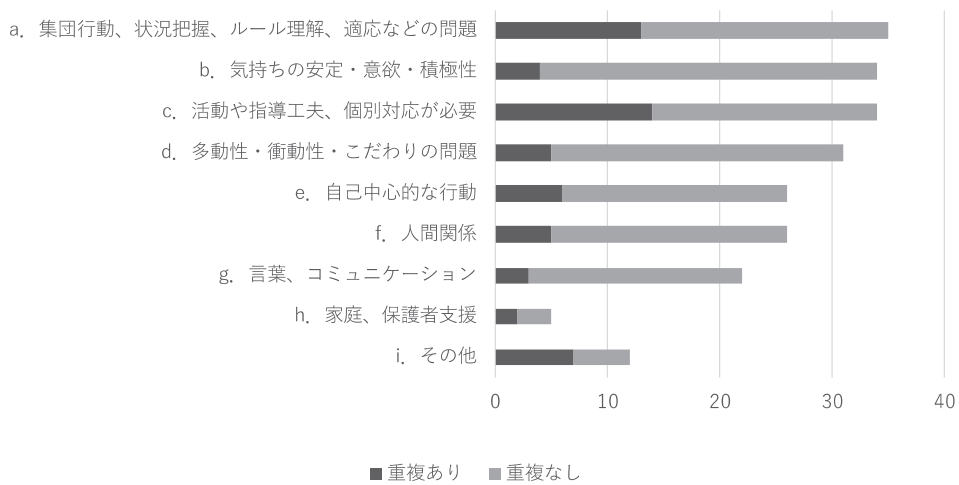


図2-32 行動に対する指導の現状と課題（記述）



## II まとめと今後の課題

### 1. まとめ

幼稚園で人工内耳装用幼児の指導を担当している教員は、比較的、障害児教育の指導経験を持った教員が多いものの、聴覚障害児の指導経験については10年以下が多かった。

人工内耳装用幼児のコミュニケーション手段については、音声言語と手話が併用、または手話を補助的に使用しているという回答が多かった。

人工内耳の装用状態では、人工内耳の両耳装用も多いことが示された。また、幼稚園入学前の1歳台や2歳台ですでに人工内耳が適応されている事例も多いという実態も示された。

人工内耳に関する研修へのニーズについては、医療情報から具体的な指導法まで多岐にわたっていたが、経験年数が浅い教員は基礎的な内容の研修に対するニーズが高いなど経験年数によって異なる傾向が見られた。

医療との連携の内容と方法については、情報共有や情報交換を中心に、様々な方法で行われていたが、「連携できていない」「全ケースではない」「保護者を通して」といった記述も多く、さらなる連携の充実についての検討が必要なことが示唆された。

補聴器装用幼児との比較では、音や音声への気づきの状態等が良好である等の特徴が示されていたが、基本的には補聴器装用児と同じだという回答が多数みられた。とくに「話し手を見る」といった傾聴態度の問題、あるいは「言葉を聴いて模倣できても意味を取り違えている」という問題の指摘が多数みられたことは、重要な視点であり、人工内耳装用幼児の指導も個々の発達上の課題に即して丁寧な指導を展開することの必要性が示唆された。

また、コミュニケーションや言語活動については、語彙の拡充、概念形成、文表現の力の向上といった言語発達について課題のある傾向がみられ、個々の幼児に適した指導上の工夫に苦慮している状況も明らかとなった。同様に、学習と生活面についても、様々な課題が示されており、個々の実態に応じた指導が展開されていることがうかがえた。

今回の調査では、重複障害のある幼児の人工内耳装用事例も多く示されたが、装用状態や聴覚活用、言語活動等の評価では、重複障害の有無によって違いがあり、重複障害のある事例では装用習慣をつける段階から丁寧な指導が不可欠であることが示唆された。

### 2. 今後の課題

幼児という発達段階を考えると、とくに学習と生活面に関する内容については、全体的な実態が表れているかどうかは検討が必要である。例えば、3歳児段階は、定型発達においてもまだ前言語的なコミュニケーションも活発な段階にあるため、指示されたこと以外の行動、あるいは衝動的な行動を取るといったことは発達上当然みられる特徴であるとも言え、離席行動などは場面によっては幼児の表現行動として肯定的にとらえる視点が不可欠となる。

本調査では、多くの事例が対象として挙げられ、発達上の課題は個別の実態によって差が大きいことも示唆された。今後、事例検討や授業研究等を含め、様々な視点からの人工内耳装用幼児の実態や指導上の課題等が明らかにされる必要がある。